2　展示

［概　要］

歴博は，歴史や文化に関する資料・情報の収集，整理，保存，公開という一連の機能を有する大学共同利用機関であり，特に，研究資源の収集と研究と展示とを有機的に連関させる「博物館型研究統合」というスタイルで，研究の成果および情報の発信をおこなっている。展示については，総合展示および企画展示，特集展示，くらしの植物苑における特別企画，人間文化研究機構の基盤機関が連携して展示を企画・実施する連携展示などをその具体的な活動として挙げることができる。

2021年度の事業として特筆すべき点は，総合展示第２室（中世）のリニューアルについて，委員会の発足が承認されたことである。第２室は，1980年に展示プロジェクト委員会を立上げて，1983年３月の歴博開館時に主要部分が開室した。その後，1997～99年度に暫定改善をおこなったものの，大規模な改修は実施することなく現在に至っている。この40年間の中世史研究の進展には著しいものがあり，中世考古学をはじめとした諸研究成果を取り込み，学界の到達点を鑑みたうえで未来を見据えた展示の枠組みを再構築する必要がある。そのため，最新の研究をリードしている館内外の研究者によって構成される第２室リニューアル委員会を組織することにした。なお，第５・６室（近・現代）のリニューアルも，引き続き進行中である。

企画展示としては，「学びの歴史像―わたりあう近代―」（2021年10月12日～12月12日）と「中世武士団―地域に生きた武家の領主―」（2022年３月15日～５月８日）を開催した。前者は，19世紀後半以降，日本列島に近代国民国家が成立していく様相を，「人々は何を学んできたのか」という視点から描き出したものである。後者は，武士団を「領主組織」という観点から捉え，中世武士の地域支配の実態を描き出したものである。どちらも本館の基幹研究の成果に基づいており，総合展示のリニューアルに反映させることを意図している。

また，新・特集展示として，「黄雀文庫所蔵　鯰絵のイマジネーション」（2021年７月13日～９月５日）を開催した。これは，所蔵者である黄雀文庫の全面的な協力のもと，国内有数の鯰絵コレクションを展示することにより，江戸時代の民衆の豊かな想像力の一端を示す内容であった。さらに，人間文化研究機構の可視化・高度化事業関連展示として，「地域社会との連携による展示実践―人間文化研究の可視化・高度化―」（2022年１月18日～２月13日）を開催した。「可搬型展示」というコンセプトのもと，６機関それぞれが開発した「モバイル型展示ユニット」を展示し，各機関の研究の特色とともに，異分野連携・地域連携による人間文化研究の可能性や展望を紹介した。

特集展示としては５つの展示を開催した。第３展示室の特集展示「『もの』からみる近世」として，「紀州徳川家伝来の楽器―こと―」（2021年５月25日～７月４日），「江戸のビスタ」（2021年12月21日～2022年１月30日），「和宮ゆかりの雛かざり」（2022年２月22日～４月３日），第４展示室の特集展示として，「エビスのせかい」（2021年７月27日～2022年１月10日），「亡き人と暮らす―位牌・仏壇・手元供養の歴史と民俗―」（2022年３月15日～９月25日）である。

くらしの植物苑の特別企画としては，伝統の桜草（2021年４月13日～５月５日），伝統の朝顔（2021年８月３日～９月５日），伝統の古典菊（2021年11月２日～11月28日），冬の華・サザンカ（2021年11月30日～2022年１月30日）を開催した。

展示担当　澤田　和人

企画展示等の実施

企画展示

「学びの歴史像―わたりあう近代―」	2021年10月12日～12月12日
「中世武士団―地域に生きた武家の領主―」	2022年３月15日～５月８日

新・特集展示

「黄雀文庫所蔵　鯰絵のイマジネーション」	2021年７月13日～９月５日

くらしの植物苑特別企画

「伝統の桜草」	2021年４月13日～５月５日

「伝統の朝顔」　2021年８月３日～９月５日
「伝統の古典菊」　2021年11月２日～11月28日
「冬の華・サザンカ」　2021年11月30日～2022年１月30日

特集展示

第３展示室　特集展示「もの」からみる近世
「紀州徳川家伝来の楽器―こと―」　2021年５月25日～７月４日
「江戸のビスタ」　2021年12月21日～2022年１月30日
「和宮ゆかりの雛かざり」　2022年２月22日～４月３日

第４展示室　特集展示
「エビスのせかい」　2021年７月27日～2022年１月10日
「亡き人と暮らす―位牌・仏壇・手元供養の歴史と民俗―」　2022年３月15日～９月25日

［総合展示リニューアル］

〈総合展示新構築〉

１．第５室・第６室リニューアル委員会

（１）概要

４月から展示設計業者とブロック・コーナーごとに検討を重ね，造作物や展示資料，パネル等の内容を詰めていった。７月22日には全体会議を開催し，B･Cブロックを中心に展示構成の変更案について審議し，承認を得た。そのように今年度での詳細設計の完成を目指して作業を進めていたが，新型コロナウイルス感染症の長期化による準備の遅延のため，10月12日の臨時執行部会議においてリニューアルオープンの１年延期が決まった。それを受けて，詳細設計は次年度の完成を目指すこととなった。この他，リニューアルに関わる資料購入や複製製作，模型の修繕等を実施した。

（２）リニューアル委員会（全体会議）

2021年７月22日　第１回全体会議（オンライン会議）

（３）リニューアル委員会（館内打合せ）

2021年４月13日，５月18日，６月８日，７月13日，９月14日，10月12日，11月25日，12月14日，12月15日，2022年１月14日，２月８日，３月８日

＊11月25日は対面，12月14日と１月14日は対面とオンラインの併用，他はオンライン会議。

（４）展示設計業者との打合せ

2021年４月22日，５月12日，５月21日，５月26日，５月27日，６月４日，６月15日，７月８日，７月30日，８月10日，８月19日，９月13日，９月16日，１月14日，１月20日

［企画展示］

「学びの歴史像―わたりあう近代―」
2021年10月12日～12月12日（開催日数54日間）

１．展示趣旨

19世紀から20世紀半ば頃までを対象に，日本列島で近代国民国家とその構成員が生成される過程を，「学び」という切り口から総体的に見直し，展示で表現する。その際強く意識するのは次の二点である。まず，伝統から近代へ，欧米からアジアへ，中央から周縁へ，強者から弱者へといった一方的な道筋から歴史を描くことはできるだけ排し，相互関係や双方向性から眺める観点。そして，学校だけが「学び」の場ではないという当たり前のことを歴史のなかからとらえ直そうとする観点である。基幹研究「学知と教育から見直す近代日本の歴史像」（2018～2020年度）の成果を展示という形で示すとともに，総合展示第５室のリニューアルを見越したものでもある。

具体的には以下の諸点がクローズアップされる。１　近世後期から幕末維新期の日本は，地理情報や言語などの相互作用を通じて，いかなる世界認識の進化・変化をなすに至ったのか。２　幕府によって開始された近代化は，

明治政府によって継承されたため，旧政権の担い手だった者もその政策に参加することが可能だった反面，狭義の政治・行政以外の文化・教育といった分野では「敗者」とみなされた旧幕臣も特有の役割を果たしたのではないか。３ 明治の殖産興業政策の下，新たな産業とその技術が欧米から取り入れられた一方，在来産業はどのように自らを再生させることができたのか，そこでの博覧会の役割とは。４ 病（やまい）との対峙。近世的「養生」から近代的「衛生」への変化に対し表出した違和感，感染症とのわたりあい，ハンセン病政策が新たに作り出す価値観とは。５ 千島列島や「蝦夷地」のアイヌは自らの言葉で，自らの手で，どのように未来を描いたか。６ 学校の登場。近代天皇制を背景とした学びの場を成立させるための舞台装置とは。また，音楽や体操を通じて行われる身体の「鋳直し」に対し，人々はどのように対峙したのか。

一見するとアラカルト風ではあるが，上記の諸テーマが持つ問題意識を総合することで全体としての時代像を描くことを目指す。

２．展示構成と主な展示資料

展示構成

第１コーナー　世界と日本の認識をめぐる〈学び〉
第２コーナー　明治の文化・教育と旧幕臣
第３コーナー　博覧会がめざした「開化」「富国」
第４コーナー　「文明」に巣くう病
第５コーナー　アイヌが描いた未来
第６コーナー　学校との出会い

主な展示資料

第１コーナー：万国公法（本館蔵），尾勢志海岸実測図（東京大学史料編纂所蔵）など
第２コーナー：開成所物産学入学姓名記（本館蔵），東京数学会社雑誌（本館蔵）など
第３コーナー：筑摩県博覧会錦絵（長野県立歴史館蔵），香川県阪出浜塩業分図（鎌田共済会郷土博物館蔵）など
第４コーナー：結核征服の栞（本館蔵），青木恵哉の「自伝」草稿（沖縄愛楽園交流会館蔵）など
第５コーナー：蝦夷語集（国立公文書館蔵），バチラー学園の鐘（だて歴史文化ミュージアム蔵）など
第６コーナー：八重山風俗図（沖縄県立博物館・美術館蔵），開智学校日誌（旧開智学校蔵）など

３．刊行物

展示図録（Ａ４判　218頁）
展示解説シート（Ａ４版　４頁）
疱瘡絵ぬり絵（絵葉書）
広報用ポスター，チラシ

４．関連行事

・報道向け内覧会
　2021年10月11日（月）13：00～
・第434回歴博講演会「東アジアにおける近代化と学知」
　2021年11月13日（土）13：00～
　講師：木村直也，会場：本館講堂

５．成果と課題

〈展示の技術等について〉

各自のスマホで音声を聞いてもらう試み，非接触型のタッチパネルは，概ね好評だった。

来館者からの指摘があったように，キャプションの文字が小さく，行間が狭い点，すなわちキャプションの文章量が多すぎる箇所があったことなどが問題点として残った。また，図録や展示室のパネル・キャプションの校正が不十分で，差し替えや正誤表で対応したとはいえ，納品後に少なからぬ修正箇所が生じてしまったのも反省点である。

〈展示の内容等について〉

６つのコーナーからなる展示構成は，近代における「学び」の多様性や幅広さを示せた一方，各コーナーのテーマ全体における位置づけ，各コーナー間の関連についての説明が足りなかったことなどから，バラバラ感が残ってしまった。アンケートでも，個々のコーナーは独立した企画展示として取り上げてもよいものであるなどと，テーマの広がりを評価する声がある反面，各コーナーの展示資料に物足りなさや深みの欠如があると，逆の指摘も受けてしまった。また，広義の「学び」を取り上げた点を評価する向きがあった一方で，「学び」というタイトルから，学校教育の歴史が展示されることを期待した向きもあったようで，狭義の「学び」と広義の「学び」とをどのようにとらえ，その違いや関係性をいかに説明するのかが不足していたことは否めない。新型コロナウイルス感染症拡大がもたらした影響もあって，現地へ出張しての事前の資料調査が十分にできなかったほか，展示プロジェクト委員が対面で打ち合わせする機会が少なく，各担当コーナー間の調整や突き合わせなどに不足する部分が生じたためである。

６．マスコミでの取り上げ

【新聞】

朝日新聞，読売新聞，毎日新聞，東京新聞，千葉日報，日本経済新聞，産経新聞，教育家庭新聞，東洋経済日報，中日新聞，茨城新聞，高知新聞，岐阜新聞，河北新報，上毛新聞等，記事数54（2022年３月末）

【雑誌・ミニコミ誌】

月刊ギャラリー４～12月号，目の眼９～12月号，ぐるっと千葉10～12月号，LANDSCAPE DESIGN 10月号，散歩の達人10月号，コミック乱11月号，日経サイエンス12月号，週刊新潮11/25号等，36誌（2022年３月末）

【テレビ・ラジオ】

ケーブルネット296「歴博のミカタ」　１番組（2022年３月末）

【その他】

Internet Museum　他ウェブ，ブログ掲載多数　32件（2022年３月末）

７．展示プロジェクト委員

（◎は代表，○は副代表）

（館外）

石居　人也　一橋大学社会学部・教授
小川　正人　北海道博物館・学芸副館長
落合　　功　青山学院大学経済学部・教授
木村　直也　元立教大学・特任教授
北原かな子　青森中央学院大学・教授
塩原　佳典　畿央大学教育学部・准教授
高木　博志　京都大学人文科学研究所・教授
谷本　晃久　北海道大学文学部・教授
得能　壽美　法政大学・非常勤講師
保谷　　徹　東京大学史料編纂所・教授

（館内）

◎樋口　雄彦　本館研究部・教授
○樋浦　郷子　本館研究部・准教授
福岡万里子　本館研究部・准教授
小瀬戸恵美　本館研究部・准教授

「中世武士団―地域に生きた武家の領主―」
2022年３月15日～５月８日（開催日数50日間）

１．展示趣旨

中世武士は，世襲制の職業戦士であるとともに，地域の領主としても存在した。中世武士の領主支配は，武士個人の力量によって実現したわけではなく，主に一族と家人によって構成された武士団という集団（組織）を形成することで実現した。そのため本企画展示では，武士団を戦闘集団ではなく「領主組織」という観点から捉える。中世武士が武士団という領主組織を形成して遂行した領主支配の実態と展開について，13世紀～15世紀を中心に，中

世の文献・考古・美術資料のほか，近世～近代の絵図・土地台帳や現地調査に立脚して復元した本拠景観にもとづき，その具体相を展示する。事例には，豊かな資料を今日に伝える，益田氏・肥前千葉氏・越後和田氏を主に取り上げる。

なお，本企画展示は2016～2018年度国立歴史民俗博物館基幹研究（A）「中世日本の地域社会における武家領主支配の研究」（研究代表者：田中大喜），同（B）「中世日本の国際交流における海上交通に関する研究」（研究代表者：荒木和憲），ならびに2019～2022年度科学研究費補助金基盤研究（B）「西遷・北遷東国武士の社会的権力化」（研究代表者：田中大喜，課題番号：19H01313）の成果公開でもある。

2．展示構成と主な展示資料（所蔵先を明記していないものは本館蔵）

展示構成

Ⅰ　戦う武士団―プロローグ―

紙本著色前九年合戦絵詞，紙本著色蒙古襲来絵詞（複製），紙本著色後三年合戦絵詞（模本・東京国立博物館蔵），太刀 無銘（伝国行），革包太刀，黒漆弓，黒猪逆頬箙

Ⅱ　列島を翔る武士団―移動と都市生活―

日蓮聖人要文集裏文書（複製・市川市立歴史博物館蔵），渋谷定心置文（入来院家文書・東京大学史料編纂所蔵），六条八幡宮旧蔵古文書第四巻，八代椎木出土梵鐘，太平記絵巻上

Ⅲ　武士団の支配拠点―地域のなかの本拠―

1　武士団の系譜認識

御神本系図（益田家蔵），尼阿忍譲状・置文（益田家文書・東京大学史料編纂所蔵），徳島本千葉系図（複製・千葉市立郷土博物館蔵）

2　武士の屋敷

絹本著色一遍聖絵第一巻（複製），同第四巻・第五巻（複製・清浄光寺蔵），絹本著色酒飯論絵巻（模本・群馬県立歴史博物館蔵），三宅御土居跡出土品（益田市教育委員会蔵），下町・坊城遺跡出土品（胎内市教育委員会蔵），千葉胤貞ヵ書下（円通寺文書・円通寺蔵）

3　本拠の構成要素

浄阿寄進状（萬福寺文書・萬福寺蔵），萬福寺境内絵図（萬福寺蔵），横田組村々図面（石見亀井家文書），雲海山岩蔵寺浄土院無縁妙法経過去帳（複製・小城市教育委員会蔵），祥兼置文（複製），韋駄天山遺跡出土品（胎内市教育委員会蔵），越後国奥山庄波月条絵図（複製），社遺跡出土品（小城市教育委員会蔵），沖手遺跡出土品（益田市教育委員会蔵），中須西原・東原遺跡出土品（益田市教育委員会蔵）

Ⅳ　武士団の港湾支配―地域の内と外をつなぐもの―

1　益田のミナトと西日本海航路

北条重時書状（個人蔵），法橋範政書状案（萩市立須佐歴史民俗資料館蔵），衆妙抄，海東諸国紀（複製），元和石見国絵図（浜田市教育委員会蔵），伯耆国河村郡東郷庄之図（模本・東京大学史料編纂所蔵），長門国二宮絵図（模本・東京大学史料編纂所蔵），中務大輔家久公御上京日記（複製）

2　和船の航海

太平記絵巻下，中世貨客両用和船復元模型，土佐日記（写本），太平記巻四・第七（古活字版），和漢船用集巻四，大友義統感状（豊後若林家文書），版本妙法蓮華経

3　大型外洋船の航海

玉葉（写本），兼仲卿記，唐船図巻（複製），日本図

Ⅴ　霊場を興隆する武士団―治者意識の目覚め―

1　「撫民」との出会い

経光卿記，版本論語集解，版本孟子第一（古活字版），広疑瑞決集（複写本・大正大学附属図書館蔵），空華日用工夫略集（写本・東京大学史料編纂所蔵）

2　地域の安穏を祈る

木造持国天立像・木造多聞天立像（円通寺蔵），蘭渓道隆書状・千葉宗胤ヵ寺領寄進状（円通寺文書・円通寺蔵），木造薬師如来坐像・木造大日如来坐像・木造十一面観音菩薩坐像（三岳寺蔵），僧隆海田地寄進状写・比丘尼浄意置文写（三岳寺文書・三岳寺蔵），木造釈迦如来坐像（医光寺蔵），紙本墨書大般若経（龍雲寺蔵）

3　鎌倉仏教の広がり

（伝）日蓮聖人曼荼羅本尊・日祐上人曼荼羅本尊・妙見之宝剣（光勝寺蔵），千葉胤貞置文案（光勝寺文書，光勝寺蔵），千葉胤貞譲状（中山法華経寺文書・中山法華経寺蔵），紙本著色千葉妙見大縁起絵巻（栄福寺蔵）

Ⅵ　変容する武士団―エピローグ―

1　武装化する本拠

沙弥円心挙状（越前島津家文書），園太暦（写本），今村利広軍忠状（南里今村文書・個人蔵），三宅御土居跡出土品（益田市教育委員会蔵），七尾城跡出土品（益田市教育委員会蔵），千葉城跡出土品・古町遺跡出土品（小城市教育委員会蔵），江上館跡出土品（胎内市教育委員会蔵）

2　地域の核になる武士団

北肥戦誌巻ノ一（写本・佐賀県立図書館蔵），田中行祐申状（複製・実相院文書・佐賀県立図書館蔵），千葉胤貞譲状案（中山法華経寺文書・中山法華経寺蔵），千葉胤泰等連署下文（河上神社文書・與止日女神社蔵），益田兼理置文・禅幸等連署起請文（益田家文書・東京大学史料編纂所蔵）

3　武士団の文化力

益田兼堯像（益田市立雪舟の郷記念館蔵），益田元祥像・茶麻地捩り織胴服（島根県立石見美術館蔵），山水図（医光寺蔵），釈迦十六羅漢図（妙義寺蔵），貿易陶磁器コレクション，君台観左右帳記

3．刊行物

展示図録（A４判　186頁）
展示解説シート（A４判　４頁）
広報用ポスター，チラシ
地図シート

4．関連行事

・報道向け内覧会
　令和４年３月14日（月）
・第436回歴博講演会「石井進『中世武士団』と企画展示「中世武士団」―武士団研究の半世紀―」
　令和４年４月９日（土）　講師：田中大喜
・第114回歴博フォーラム「中世武士団の世界」
　令和４年４月16日（土）　講師・田中大喜，荒木和憲，中司健一，田久保佳寛，水澤幸一
・国立歴史民俗博物館企画展示「中世武士団」オンラインイベント
　令和４年４月30日（土）　講師・田中大喜，中司健一，田久保佳寛，水澤幸一

5．成果と課題

〈成果〉

日本の前近代社会において，武士はおよそ700年もの間，支配者として君臨していた。この事実は自明のこととして受け入れられているように思われるが，本企画展示では，最初にそもそも武士とは職業戦士であることを本質とした社会集団であったことを示し，そこから前近代の日本社会はなぜ武士を支配者として受容したのか，という問題を提示して，地域社会を支配する中世武士の領主としての姿を具体的に追うことで，その解決に向けた手がかりを観覧者に考えてもらうことを企図した。中世武士が領主として地域社会に定着できた背景については，日本中世史の学界においてさまざまな議論が出されている状況にあることから，本企画展示はいまだ究明されていない問題に取り組んだ，いわば試論的な展示であったと認識している。

そのため，「武士団」という一般観覧者にも比較的なじみのある学術用語を展示タイトルに使用したものの，展示内容はかなり専門的なものとなり，一般観覧者には難解な内容になることが予想された。そこで，一般観覧者の内容理解の補助として，①音声ガイドの作成，②古文書の翻刻を別刷りにして作成し，ハンズオンの形式で内容を確認してもらう，③益田氏と千葉氏の人物をモデルにした展示キャラクターを作成して，展示キャプションとは別にキャラクターに内容のポイントを簡潔に話してもらう，などの工夫に努めた。これらのうち，特に③は内容理解に大変助かったという声をアンケートに多数いただくことができた。

中世武士の領主としての姿は，どうしても文献資料による情報が多くなるが，本企画展示では考古や美術（絵画・彫刻）資料もできるだけ多く活用するように心がけた。これにより，中世武士の領主としての姿を多様な歴史資料から立体的に明らかにするように努め，展示もバリエーションに富んだ資料によって構成することができた。展示図録が会期中に完売されたのも，バリエーションの豊かな資料が掲載されたことが要因になったように思われる。

本企画展示で事例として取り上げた武士団は，石見益田氏・肥前千葉氏・越後和田氏だった。いずれも豊かな地域資料に恵まれ，日本中世史研究のなかでは著名な武士団だが，首都圏在住の一般観覧者にとってはなじみのない

武士団ばかりとなった。それでもアンケートの集計結果を見ると，「非常に満足」と「満足」で82パーセントを占めたことから，普段なかなか見ることができない資料を見ることができたと，観覧者に好意的に受け取ってもらえたと受けとめる。展示解説シートが会期中にすべて捌けたことも，このことを示していると思われる。なお，特に肥前千葉氏は，もともと下総国を本拠とした千葉氏の一族であるので，千葉県在住の観覧者には高い関心を寄せていただけたものと思う。

〈反省と課題〉

2021年度の事業計画において，本企画展示には2,114万円の予算をお認めいただいた。この予算額に収めるべく，できるだけ館蔵資料を使用するほか，外部資金を導入して一部経費を賄い，造作は極力減らし，所蔵機関から認められた資料についてはハンドキャリーによって借用するなど，努力を重ねてきた。その甲斐もあって，2021年度の支出額総計は1,548万円となり，予算額に収めることができた。しかし，展プロが発足した2019年度から2022年度の撤収までの総経費は2,196万円となった。本企画展示はもともと「館蔵資料型」企画展示であり，総経費は1,600万円とされていたため，予定されていた予算額を596万円オーバーする結果となった。1,600万円に収められなかったことは反省しなければならないが，本企画展示は今後の第２展示室のリニューアルに向けた貴重な財産になったことは間違いないので，そこに活かしていく所存である。

本企画展示の入場者数は，16,020人だった。目標としていた20,000人に届かなく，残念であった。なじみの薄い資料が並ぶだけに，ポスター・チラシだけでなくTwitterやYou TubeなどのSNSを利用した広報にも努め，開幕後３月下旬までは多くの観覧者に恵まれた。しかし，４月に入ると客足が落ち込み，４月下旬の大型連休まで苦戦が続いた。４月に入ってから有効な広報を打つことができなかったことが反省される。開幕前もさることながら，会期に入ってからいつ，どのような広報を打っていくべきか，展プロと広報サービス室が密接に連携して，計画的に進めて行くことが大事だと思われる。

本企画展示では，資料調査とフィールドワークの成果にもとづいて復元した武士団の本拠景観を，デジタルパネルを用いて展示した。明治期の地籍図と敗戦直後から現在までの航空写真との比較もでき，現地の様子や歴史的変遷を具体的に把握できる仕組みを整えたが，操作方法の説明が不充分だったため，観覧者にはわかりにくいものとなり，有効に活用されなかったことが惜しまれる。今後，歴博のWEB上から公開し，多くの方に活用していただくことを予定している。また，データを益田市と小城市にも提供し，それぞれの市民の地域学習にも活用していただくことを予定している。

上述したように，本企画展示は首都圏在住者にはなじみの薄い地域を取り上げる展示となった。しかし，事例として取り上げた自治体と信頼関係を築き，その協力を得て調査研究成果にもとづく展示ができたことは，歴博にふさわしい展示になったように考える。自治体・地域博物館との連携にもとづく調査研究・展示の方法を，今後も追究していきたい。

６．マスコミでの取り上げ

【新聞】

朝日新聞，読売新聞，毎日新聞，東京新聞，千葉日報，日本教育新聞，教育家庭新聞，東洋経済日報，中外日報，山陰中央新報，中日新聞，高知新聞，北日本新聞，佐賀新聞等，記事数35（2022年３月末）

【雑誌・ミニコミ誌】

美術の窓12月号，月刊ギャラリー２・３月号，サライ３月号，ぐるっと千葉３・４月号，mono ４/２号，房総ファミリア新聞，ちいき新聞等，26誌（2022年３月末）

【テレビ・ラジオ】

2022年３月末までは該当なし

【その他】

Internet Museum，美術展ナビ　他ウェブ，ブログ掲載多数　30件（2022年３月末）

７．展示プロジェクト委員（◎：代表，○：副代表）

（館外）

小野　正敏　国立歴史民俗博物館・名誉教授

角野　広海　島根県立石見美術館・学芸員

高木　徳郎　早稲田大学教育・総合科学学術院・教授

田久保佳寛　小城市教育委員会・副課長

出口　晶子　甲南大学文学部・教授
中司　健一　益田市歴史文化研究センター・主任
西田　友広　東京大学史料編纂所・准教授
水澤　幸一　胎内市上下水道課・参事
湯浅　治久　専修大学文学部・教授
（館内）
◯荒木　和憲　本館研究部・准教授（令和４年４月１日より九州大学大学院人文科学研究院・准教授）
河合佐知子　本館研究部・特任助教
小島　道裕　本館研究部・教授（令和４年３月31日まで）
後藤　　真　本館研究部・准教授
鈴木　卓治　本館研究部・教授
◎田中　大喜　本館研究部・准教授
松田　睦彦　本館研究部・准教授
村木　二郎　本館研究部・准教授

［新・特集展示］

「黄雀文庫所蔵　鯰絵のイマジネーション」
2021年７月13日～９月５日（開催日数42日間）

１．展示趣旨

安政２年10月２日（1855年11月11日）に発生した安政江戸地震，いわゆる安政の大地震は，江戸の町に甚大な被害をもたらした。地震の直後から，被災状況を伝える瓦版などさまざまな刷物が売り出されたが，地震の元凶とされた地中の大鯰をモチーフとし，今日「鯰絵」と呼ばれる版画。鯰絵は鹿島大明神や要石で制せられるもの，蒲焼きにして鯰を懲らす民衆，震災で潤った者たちと損失を蒙った者たちとを対比したもの，あるいは歌舞伎の一場面をパロディにしたものなど，さまざまな主題と趣向を取り入れ，同年の12月に当局から禁止されるまでの間，200種を越えるものが発行されたといわれている。鯰絵には地震に対する怖れや震災後の世相に対する風刺，あるいは世直しへの願望など，民衆のさまざまな思いが投影されている。本展では，黄雀文庫所蔵の鯰絵コレクションを通して，未曽有の災害に遭いながらも，諧謔や風刺の精神でたくましく乗り越えようとした民衆の豊かな想像力を江戸の都市文化の文脈の中でとらえようとしたものである。

２．展示構成と主な展示資料

展示構成
プロローグ
第一章　地震の被害
第二章　鹿島・要石・神馬（信仰と鯰絵）
第三章　損する人・得する人
第四章　パロディ
第五章　一枚摺り
第六章　その他

主な展示資料
黄雀文庫蔵鯰絵コレクション211点
鯰絵「地震よけの歌」版木（個人蔵）
『安政見聞誌』（H-60-21-71）などの震災関係刊行物
「両国夕景一ツ目千金」（H-22-１-１-202）など，安政地震関係の錦絵
「幕末維新期風刺絵」（H-26）

３．刊行物

展示図録（Ａ４判　146頁）

展示解説シート（A４版　４頁）
広報用ポスター，チラシ

４．関連行事
・報道向け内覧会
　2021年７月12日（月）13：00～

５．成果と課題
　近年，歴史や民俗資料としても注目されている鯰絵を国内最大級のコレクションを用いて一堂に公開したことの意義は大きいものと思われる。200点以上の鯰絵を全点カラーで掲載した図録や画集は前例がなく，資料的な価値が大きい。館内館外展プロによる図録エッセイは，美術史学，歴史学，民俗学，分析科学など多彩な分野にわたり，歴博らしい学際性を実現することができ，一部，共同研究「災害の記録と記憶をめぐる資料論的研究」（2012～2014年度），「近世の一枚摺文化の受容と都市社会の研究」（2014～2016年度）た。
　また，序章と終章に関しては，安政江戸地震に関する瓦版や絵図，幕末期の風刺画などの館蔵資料を中心に構成し，展示に深みを持たせることができた。
　資料所蔵者である黄雀文庫および平木浮世絵財団の全面的な援助を得て，額やマット等の展示経費を大幅に節約することができ，限られた予算内で開催することができた。また，外部展プロは展示や撤収にも参加いただき，展示作業をスムーズに進めることができた。会期は前後期に分けたが，１日の休館日でほぼ全点を展示替えするというタイトなスケジュールであった。館内の献身的なサポートで無事勤務時間内に終えることができた。
　展示スペースに対して，当初の想定よりも展示資料数が多くなったこと，およびコロナ禍の中で滞留時間が長くなることを避けるため，解説パネルの数は必要最小限にとどめたが，そのことが観覧者に対する説明不足につながったことは否定できない。観覧者からの質問や感想の中に，なぜ鯰絵が当局から禁止されたのか，鯰と瓢箪の組み合わせの絵が多いのはなぜか，といった展プロメンバーにとっては自明のことを問うものが散見され，基本的な事実・事項に対する説明が不足していたことは反省材料である。
　広報連携センターの多面的サポートや，東日本大震災から10年目という節目の年だったこともあり，展覧会に対するメディアの反応はおおむね良好だったが，会期中緊急事態宣言が発出されたことで観覧者数が伸び悩んだ。

６．マスコミでの取り上げ
【新聞】
朝日新聞，読売新聞，毎日新聞，東京新聞，千葉日報，日本経済新聞，教育家庭新聞，東洋経済日報，中日新聞，南日本新聞，琉球新報，大阪日日新聞，茨城新聞，中国新聞，河北新報，京都新聞等，記事数61（2022年３月末）
【雑誌・ミニコミ誌】
歴史人７月号，おとなが愉しむ　すごい美術展2021-2022，目の眼７～９月号，ぐるっと千葉７～９月号，コミック乱８月号，おとなのおしゃれ手帖８月号，美術の窓８月号，芸術新潮８月号等，41誌（2022年３月末）
【テレビ・ラジオ】
ケーブルネット296「歴博のミカタ」，日曜美術館アートシーン　２番組（2022年３月末）
【その他】
Internet Museum，美術展ナビ　他ウェブ，ブログ掲載多数　27件（2022年３月末）

７．展示プロジェクト委員
（◎は代表，○は副代表）
（館外）
　佐藤　光信　公益財団法人平木浮世絵財団・理事長
　森山　悦乃　公益財団法人平木浮世絵財団・理事・主任学芸員
　松村真佐子　公益財団法人平木浮世絵財団・学芸員
　湯浅　淑子　たばこと塩の博物館・主任学芸員
（館内）
◎大久保純一　本館研究部・教授
○島津　美子　本館研究部・准教授
　久留島　浩　本館研究部・特任教授

川村　清志　本館研究部・准教授

［くらしの植物苑特別企画］
「季節の伝統植物」

春：伝統の桜草　　2021年４月13日（火）～５月５日（水・祝）（21日間）
夏：伝統の朝顔　　2021年８月３日（火）～９月５日（日）（31日）
秋：伝統の古典菊　　2021年11月２日（火）～11月28日（日）（24日），肥後菊は12月５日（日）まで
冬：冬の華・サザンカ　2021年11月30日（火）～2022年１月30日（日）（41日）
　　＊冠木門工事，苑路舗装工事のため，12月21日（火）～26日（日）臨時休苑

１．展示趣旨

江戸時代に隆盛をきわめた園芸文化は，日本独自の感性と高度な技術により，多種類の植物群にわたっておびただしい品種群を作り出してきた。それらの多くは明治時代以降の西洋園芸の急速な普及によって失われ，かつての園芸技術も消滅しようとしている。この特別企画は，絶滅に瀕している古典園芸植物の系統の探索と維持，生物学的な基礎研究と歴史的な基礎研究の融合を行い，その成果を展示として公開するものである。

２．展示構成と主な展示品

特別企画「季節の伝統植物」では，四季に関わる４つの園芸植物を展示した。

春：「伝統の桜草」とは，江戸時代中期以降，園芸家によって野生種の中から変わった花が探し出され，多くの品種が生み出されてきた一連の桜草をさす。今年度は，「桜草の栽培史―江戸中期から幕末まで―」というテーマで企画を立てた。パネル展示は江戸中期から様々な園芸品種が出現し，連がつくられて品評会が開催されたことによって品種が増えて，桜草文化が形成・発展した様子を展示した。

夏：「伝統の朝顔」とは，江戸時代以降になると，文化・文政・天保期，嘉永・安政期，明治・大正期など，繰り返し朝顔ブームが訪れ，そのたびに葉と花の多様な変化や組み合わせを楽しむために作り出されてきた変化朝顔を意味する。今年度は，幕末から明治初期におこった「外国人がみた朝顔」をテーマとした。具体的には，旅行家であり地理学者でもあるイギリス人のエリザ・シドモアの紀行文について紹介する。次に，津田梅子がアメリカにホームステイしていた時のお礼として変化朝顔の種を送ったところ，芽が出ないという返信を受け，変化朝顔の発芽率について送った手紙を紹介する。ただし，解説会・観察会ともにコロナの影響で中止となった。

秋：「伝統の古典菊」とは，筆先のような花弁をもつ「嵯峨菊」や花弁の垂れ下がった「伊勢菊」，花弁のまばらな「肥後菊」，花弁が咲き始めてから変化していく「江戸菊」のことである。これらに花の中心が盛り上がって咲く丁子菊を加えた伝統的な中輪種は「古典菊」と呼ばれている。今回は，「外国人がみた菊」をテーマとし，プラントハンターのロバート・フォーチュンが執筆した『江戸と北京』と旅行家のイザベラ・バード『日本奥地紀行』を題材とし，彼らが関心を抱いた菊について紹介する。

冬：サザンカは，自生種に近い「サザンカ群」，獅子頭の実生またはその後代と考えられている「カンツバキ群」，サザンカとツバキの間で自然にできた雑種またはその後代と考えられている「ハルサザンカ群」の３グループに大別されるが，花はグループごとに10月中頃から翌年２月にかけて上記の順に咲いていく。今年度の「冬の華・サザンカ」では，「サザンカと栽培地域の拡大―各地の古木サザンカを訪ねて―」をテーマとする。サザンカは常緑性の南方系植物で，山口県萩市が自生北限地として知られている。それが，江戸時代初期以降の園芸化と耐寒性の強いヤブツバキと自然交雑したことで栽培地域が拡大した。このような栽培適地を判定するのに使われる指標が，樹齢100年あるいは200～300年の古木であるが，太平洋側では関東平野の最北端，日本海側では福井県までであった。ところが，近年になってから植栽によって宮城県多賀城市にまで栽培地域が拡大している。そこで，これらの経緯を踏まえながら，サザンカの栽培地域が拡大していった過程について紹介する。

３．主な行事

特別企画「季節の伝統植物」に関連した観察会

2021年４月24日（土）：第265回「桜草の栽培史―江戸中期から幕末まで―」　水田大輝
　　８月28日（土）中止：第269回「外国人がみた変化朝顔　仁田坂英二
　　11月28日（土）：第272回「外国人がみた古典菊」　平野恵

特別企画「季節の伝統植物」に関連した講演会
2021年12月11日（土）：第429回「サザンカの文化史と園芸品種」　　箱田直紀

苗の有償頒布〔桜草：４月13日（火）～５月５日（水・祝），朝顔：６月22日（火）～25日（金）
菊：７月10日（土）・11日（日），サザンカ：11月30日（火）〕

４．成果と課題

「伝統の桜草」は，江戸中期から園芸化が進み，幕末の混乱で一時期ブームが去っていく。そのような経緯を紹介した。

「伝統の朝顔」は，コロナの影響で解説会と観察会を開催できず，広報活動も積極的にできなかった。また天候不順が続いたため，来苑者数が例年よりも少なかった。「外国人がみた朝顔」をテーマにエリザ・シドモアと津田梅子について紹介したが，十分な解説をする場がなかったため，翌年度にあらためて内容を充実させた特別企画をおこなうこととした。

「伝統の古典菊」ではロバート・フォーチュンとイザベラ・バードの文献を中心としながら，図像を交えた解説を行った。彼らの文献は書店で手に入りやすいため，来苑者にとって興味深い展示ができたと思う。

「冬の華･サザンカ」は2001年に特別企画を始めた。このため,20周年記念として2020年に第424回歴博講演会「サザンカ今後の展望」(講師:箱田直紀,恵泉女学園大学名誉教授)を予定していたが,これもコロナの影響で中止となった。これの代わりとして，2021年12月11日（土）に「サザンカの文化史と園芸品種」というタイトルで箱田直紀氏に講演会を行っていただいた。

５．マスコミでの取り上げ

【新聞】
朝日新聞，読売新聞，東京新聞，千葉日報，産経新聞，花卉園芸新聞等，記事数47（2022年３月末）
【雑誌・ミニコミ誌】
子供の科学５月号，趣味の山野草５・９・12月号，週刊文春　８/12,19号，ざ・いけのぼう，プランツ＆ガーデン’21winter，趣味の園芸12月号，ぐるっと千葉５・８・９・11・12・１・２・４月号等，45誌（2022年３月末）
【テレビ・ラジオ】
Newsちば等，３番組（2022年３月末）
【その他】
ファッションプレス　他ウェブ，ブログ掲載多数　40件（2022年３月末）

６．展示プロジェクト（◎：代表，○副代表）
（館外）
辻　誠一郎　東京大学名誉教授
仁田坂英二　九州大学大学院理学研究院・准教授
箱田　直紀　恵泉女学園大学名誉教授
平野　　恵　台東区立中央図書館・専門員
岩淵　令治　学習院女子大学・教授
水田　大輝　日本大学生物資源科学部・専任講師
（館内）
◎青木　隆浩　本館研究部・准教授
日高　　薫　本館研究部・教授
○澤田　和人　本館研究部・准教授
川村　清志　本館研究部・准教授
山村　　聡　本館管理部・専門職員

［特集展示］

第３展示室「紀州徳川家伝来の楽器―こと―」
2021年５月25日（火）～７月４日（日）

１．展示趣旨

本館が所蔵する紀州徳川家伝来楽器コレクション（159件）は，主として紀州藩の第十代藩主徳川治宝（とくがわはるとみ・1771～1853）によって収集されたものと伝えられる。雅楽器を中心に，吹きもの（管楽器）・弾きもの（弦楽器）・打ちもの（打楽器）など各種の楽器や，楽譜，調律具，収納袋や箱などの附属品，さらに楽器にまつわる情報を記した附属文書から構成されており，楽器史や音楽史上きわめて重要な資料である。

今回の特集展示では，本コレクションの絃楽器の中から，「こと」，すなわち琴や箏の仲間の楽器をとりあげ，附属品や附属文書とともに展示する。コレクション中には，雅楽に用いられる箏や和琴，江戸時代の文人に愛好された七絃琴のほか，鼓瑟，板琴など多彩な琴箏類が含まれる。

これら多彩な「こと」を比較できるように展示し，歴史的な解説を加えることによって，一般にはあまり馴染みのない古楽器への理解をうながすとともに，高度な工芸技術や，江戸後期の大名家を中心とした文化の一端を紹介する。

なお，本資料は最大級の日本古楽器コレクションとして広く知られており，2005年度に特別企画「紀州徳川家伝来の楽器」，2012年には企画展示「楽器を語る―紀州藩主徳川治宝と君子の楽―」を開催し，主要なものを紹介してきた。また，2003年度に刊行した『国立歴史民俗博物館資料図録３　紀州徳川家伝来楽器コレクション』，および＜データベースれきはく＞において，その豊富な資料情報を公開している。「笙」「琵琶」「笛」「琵琶Ⅱ」に続くこの特集展示においては，企画展示等に出品される機会の少ない資料についても，順次，展示・公開をすすめ，その全貌を紹介することを目的としている。

２．おもな展示資料

紀州徳川家伝来楽器コレクション（H-46）より

箏（銘「君が千歳」）	１面	万治年間（1658-1661）神田治定作
箏（銘「武蔵野」）	１面	天明年間（1781-1789）
和琴（銘「都風」）	１面	室町時代
和琴（銘「大桐」）	１面	延徳年間（1489-1492）多忠時作
七絃琴（銘「谷響」）	１面	
琴案	１基	寛政10年（1798）黙翁真剰作
鼓瑟	１面	江戸時代　桐屋丹後作
板琴	１面	江戸時代

など28件

３．関連行事

展示解説会（新型コロナウイルス感染症防止対策のため中止）

４．刊行物

展示解説シート，広報用ポスター・チラシ

５．成果と課題

「こと」は和楽器の中では比較的一般に馴染みのある楽器といえるが，「琴」「箏」の漢字の書き分けや，用語上の歴史的混乱もあり，その理解は表面的なレベルにとどまっている感がある。そこで，今回の特集展示では，紀州徳川家の楽器コレクションに含まれるさまざまな「こと」の仲間を比較的できるように展示し，各々の楽器の構造的な特色や歴史的な背景を概観することにより，琴箏類の楽器へのより深い理解を促すことに腐心した。コレクションには，通常目にする機会の少ない「こと」も含まれるため，観覧者は，「こと」の多様さへの驚きや興味が喚起されたようで，展示の意図が概ね伝わったと考えている。

コレクションには，今回展示できなかった箏や和琴が残されており，公開される機会の少ないこれらの楽器が今後展示されることが望まれるが，大型の資料で展示スペースを要することから，本展示においてはこれらを一度に

公開することは困難であった。

６．マスコミの取り上げ

【新聞】

朝日新聞，毎日新聞，東京新聞，千葉日報等，記事数34（2022年３月末）

【雑誌・ミニコミ誌】

ぐるっと千葉５～７月号，目の眼６・７月号等，７誌（2022年３月末）

【テレビ・ラジオ】

ケーブルネット296「歴博のミカタ」　１番組（2022年３月末）

【その他】

ARTAgendA　他ウェブ，ブログ掲載多数　７件（2022年３月末）

７．展示プロジェクト（◎：代表）

◎日高　　薫　本館研究部・教授

　内田　順子　本館研究部・教授

第３展示室「江戸のビスタ」

2021年12月21日（火）～2022年１月30日（日）

１．展示趣旨

ビスタ（英，vista）の語義のひとつに，「並木や家並みに挟まれた長く細い眺望」があり，深い奥行きで見通した都市の大通りの眺望などがイメージされることが多い。

江戸時代後期，人口100万を擁する巨大都市に成長した江戸の街には，市街地の発展にともないいくつもの目抜き通りが形成され，正面に富士を見通す駿河町や日本橋を中心に南北に延びる通町などは，浮世絵師らが繰り返し名所絵に描いている。また，江戸市街地で大きな面積を占める大名屋敷の長大な表長屋も歌川広重の名所絵などの好画題であった。江戸後期の風景画の成立には透視図法（線遠近法）的視覚の流入という絵画技術面での変革だけでなく，都市としての江戸の街の成熟やその特質も少なからぬ要因となっていたと考えられる。

本展では，江戸のビスタを描いた館蔵の浮世絵版画や民衆絵画の泥絵を通して，都市風景画の母胎となった江戸の都市景観について考える。

２．おもな展示資料

歌川国貞　初春の駿河町　H-22-31

歌川国輝　東都本町弐丁目ノ景　H-22-32

歌川広重　名所江戸百景　日本橋通一丁目略図　H-22-16

筆者不詳　泥絵　江戸城堀端図　H-1644-１　　など

３．関連行事

展示解説会（新型コロナウイルス感染症防止対策のため中止）

４．刊行物

展示解説シート，広報用ポスター・チラシ

５．成果と課題

過去に第３展示室のリニューアルのために購入したが，必ずしも展示機会に恵まれなかった都市風景を主題とした錦絵や泥絵を，透視図法的視覚を利用した都市風景というあまり前例を見ないテーマ設定による展示として構成するというかたちで活用できた。現在の写真と比較することで，観覧者に描かれた場所をより興味を持って見てもらえた。ただ，展示作品の大半が制作された19世紀にいたるまでの日本における透視図法の受容と咀嚼の過程も冒頭に置くことができれば，絵画史に詳しくない観覧者の理解の助けになったかと考えられる。当館はその時代の絵画資料をほとんど所蔵しないが，他機関の資料を画像パネル等で掲示するといった展示も検討すべきだったかもしれない。

６．マスコミの取り上げ

【新聞】

朝日新聞，毎日新聞，東京新聞，千葉日報等，記事数26（2022年３月末）

【雑誌・ミニコミ誌】

ぐるっと千葉12～２月号，目の眼12～２月号，Discover Japan １月号，東京人　２月号等，19誌（2022年３月末）

【テレビ・ラジオ】

ケーブルネット296「歴博のミカタ」　１番組（2022年３月末）

【その他】

ファッションプレス　他ウェブ，ブログ掲載多数　28件（2022年３月末）

７．展示プロジェクト（◎：代表）

◎大久保純一　本館研究部・教授

第３展示室「和宮ゆかりの雛かざり」
2022年２月22日（火）～４月３日（日）

１．展示趣旨

幕末の動乱期，14代将軍徳川家茂に降嫁したことで知られる和宮所用の雛人形･雛道具類（本館所蔵）を公開し，江戸の雛市に関する展示も行った。

上巳（三月三日節）にとりおこなわれる雛祭りの行事は，江戸時代に入ってから広まりをみせ，多くの女性たちの支持を集めた。儀式が定着するにつれ，その装飾は華麗なものとなり，時代時代の流行を取り入れながら，寛永雛，元禄雛，享保雛，次郎左衛門雛，有職雛，古今雛と俗称される多彩な雛人形や，精巧に作られたミニチュアの道具類が生みだされていった。諸記録によれば，皇女和宮も，数多くの雛人形を手もとにおき，上巳にはあちこちと雛人形を贈りあうなど，雛まつりを楽しんだようである。本館所蔵の雛人形・雛道具はその一部をなしていたと考えられるが，有職雛と呼ばれる種類の雛人形と，江戸七澤屋製の各種雛道具，御所人形および三ツ折人形などが含まれ，江戸時代の文化や工芸技術を伝える資料として貴重である

なお，今回は，長州藩士の子孫に受けつがれ，和宮から下賜されたという伝承をもつ有職雛を併せて展示した。この内裏雛は，昨年度に本館が収蔵した初公開の資料である。

２．おもな展示資料

内裏雛及雛道具付御所人形（H-40）より

有職雛（直衣雛）

御所人形　孝明天皇遺物など13躯

三ツ折人形　孝明天皇遺物のうち２躯

須磨明石図屏風

狗張子

牡丹唐草文蒔絵雛道具

内裏雛（H-2057，初公開資料）より

有職雛（内裏雛）

雛屏風　　など約100点

３．関連行事

展示解説会（新型コロナウイルス感染症防止対策のため中止）

４．刊行物

展示図録（刊行済み），展示解説シート，広報用ポスター・チラシ

５．成果と課題

当館の季節展示として広く知られるようになり，雛人形ブームや有名な皇女和宮所用の雛かざりの展示というこ

とで好評であった。

６．マスコミの取り上げ

【新聞】

朝日新聞，毎日新聞，東京新聞，千葉日報等，記事数23（2022年３月末）

【雑誌・ミニコミ誌】

ぐるっと千葉２～４月号，目の眼２～４月号，ならしの朝日等，15誌（2022年３月末）

【テレビ・ラジオ】

ケーブルネット296「歴博のミカタ」　１番組（2022年３月末）

【その他】

美術展ナビ　他ウェブ，ブログ掲載多数　15件（2022年３月末）

７．展示プロジェクト（◎：代表）

日高　　薫　本館研究部・教授

◎澤田　和人　本館研究部・准教授

第４展示室「エビスのせかい」
2021年７月27日（火）～2022年１月10日（月・祝）

１．展示趣旨

エビスは私たちにとって最も身近で親しみ深い神のひとつである。しかし，エビス信仰の起源や，各地で受容されていく過程には不明な点が多く，信仰の要素も多様で複雑である。現在エビスは，福神として漠然と認識される傾向にあるが，元来，漁業の神をはじめとして，商業の神，農業の神といった，生業と結びついた性格も強い。

かつて，総合展示第４室（民俗）ではエビス信仰の中心のひとつである西宮神社の吉兆を展示していたが，本館ではその他にも，漁師が着用した万祝や商家のエビス講を描いた錦絵，農家でまつられた恵比寿大黒像，エビスまわしの阿波人形など，エビス信仰の諸相を示す資料を多数収蔵している。本展示では，これらの館蔵資料を活用することで，エビス信仰のさまざまな側面を解説，紹介する。

２．おもな展示資料

F-10　十日戎吉兆

H-1874-203　紺木綿地恵比寿大黒模様型染万祝

H-22-１-26-42　江戸風俗十二ヶ月の内 十月 豪商恵比寿講祝の図

H-22-３-172　十二月少年あそびすご六

F-181　エビスマワシ復元

F-546　オイベッサー

３．関連行事

展示解説会（新型コロナウイルス感染症防止対策のため中止）

４．刊行物

解説シート，広報用ポスター・チラシ

５．成果と課題

本展示は歴博が所蔵するエビス関連資料を活用するとともに，コロナ禍によって開催中止となった企画展示「昆布とミヨク―潮香るくらしの日韓比較文化誌」の一部を使って，エビス信仰の解説をすることを目的として開催された。一般的に福神として知られるエビスだが，そのイメージは漠然としている。本展示では商業神や漁業神，農業神といった具体的な神徳を実際の資料から紹介することで，来館者のエビス信仰に対する理解を深めたと確信している。さらに，エビスの明るく福々しい姿は，コロナ禍による重苦しい社会情勢下で暮らす多くの来館者の心を和ませた。そのことは，アンケートの記述をはじめ，マスコミによる取り上げ方からもうかがうことができる。課題として特記すべき点は見当たらないが，コロナ禍による出張の制限により，展示資料にかかわる追加の調査をお

こなうことができなかったのが残念であった。

6．マスコミの取り上げ

【新聞】

朝日新聞，毎日新聞，東京新聞，千葉日報，日本経済新聞等，記事数32（2022年３月末）

【雑誌・ミニコミ誌】

ぐるっと千葉８～１月号，目の眼９～１月号，週刊文春　７月22日号，小原流挿花12月号等，28誌（2022年３月末）

【テレビ・ラジオ】

ケーブルネット296「歴博のミカタ」，日曜美術館アートシーン　２番組（2022年３月末）

【その他】

ファッションプレス　他ウェブ，ブログ掲載多数　24件（2022年３月末）

7．展示プロジェクト（◎：代表）

◎松田　睦彦　本館研究部・准教授

　小池　淳一　本館研究部・教授

第４展示室「亡き人と暮らす―位牌・仏壇・手元供養の歴史と民俗―」
2022年３月15日（火）～９月25日（日）

1．展示趣旨

日本の先祖祭祀において仏壇の果たしてきた役割は大きい。寺檀制度の浸透とともに仏壇が一般に普及し，生活空間内で日常的な祭祀が行われるようになっていった。従来，仏壇の起源については関心が払われてきたが，仏壇の祭祀において切り離すことのできない位牌やその他の仏具をつかってどのように祭祀されてきたのかについては，地域的な多様性も含め，まだ十分に解明されていない点も多い。さらに近年，少子高齢化の進展や家族観の変容によって，仏壇じまいや手元供養など，大きな変容も生じている

そこで本展示では，仏壇や位牌，仏具などの祭具に注目し，仏壇祭祀の展開やその地域的多様性，現代の変化など，家内における先祖祭祀の多様な歴史と民俗について取り上げるものである。

2．おもな展示資料

F-320-813　図画百鬼夜行
F-320-791　二代目中村翫雀死絵
F-322-77　沖縄仏壇
F-322-78　トートーメー
F-７-1052　戸棚（仏壇）
G-90-16-８　八橋人形　地蔵
F-322-167　匝瑳地域旧家位牌
F-322-21　繰り出し位牌
F-336　板位牌
F-148-２-148　燭台
F-148-２-151-１　花瓶　　ほか

3．関連行事

展示解説会（新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止）

4．刊行物

展示解説シート，広報用ポスター・チラシ

5．成果と課題

共同研究「家内における死者祭祀・祭具の現在とその歴史的検討：変容するモノ・家族・社会」の成果の一部として，日常生活空間の中の死者祭祀について，おもに仏壇や位牌などを物質文化の側面から取り上げた。仏壇やな

かでも位牌をまとめて扱った展示は，管見の限り従来開催されたことはなく，画期的であり，研究博物館である本館らしい展示と考える。そしてその資料の一部は，葬送儀礼資料として長年収集してきたものであり，博物館型研究統合を実践できたととらえている。ただし，位牌や仏壇の多様性については，まだ十分に提示し切れていない点もある。また手元供養や仏壇じまいなど，新たなテーマについては，今後の研究の進展とともにさらに掘り下げが必要と考えており，今後の課題としたい。

６．マスコミの取り上げ

【新聞】
千葉日報等，記事数３（2022年３月末）
【雑誌・ミニコミ誌】
ぐるっと千葉３・４月号，目の眼４月号等，５誌（2022年３月末）
【テレビ・ラジオ】
2022年３月末までは該当なし
【その他】ARTAgendA　他ウェブ，ブログ掲載多数　14件（2022年３月末）

７．展示プロジェクト（◎：代表）
◎山田　慎也　本館研究部・教授

［展示プロジェクト委員会］
新特集展示「黄雀文庫所蔵　鯰絵のイマジネーション」

１．展示プロジェクトの趣旨

安政２年10月２日（1855年11月11日）に発生した安政江戸地震，いわゆる安政の大地震は，江戸の町に甚大な被害をもたらした。地震の直後から，被災状況を伝える瓦版などさまざまな刷物が売り出されたが，地震の元凶とされた地中の大鯰をモチーフとし，今日「鯰絵」と呼ばれる版画。鯰絵は鹿島大明神や要石で制せられるもの，蒲焼きにして鯰を懲らす民衆，震災で潤った者たちと損失を蒙った者たちとを対比したもの，あるいは歌舞伎の一場面をパロディにしたものなど，さまざまな主題と趣向を取り入れ，同年の12月に当局から禁止されるまでの間，200種を越えるものが発行されたといわれている。鯰絵には地震に対する怖れや震災後の世相に対する風刺，あるいは世直しへの願望など，民衆のさまざまな思いが投影されている。本展では，黄雀文庫所蔵の鯰絵コレクションを通して，未曽有の災害に遭いながらも，たくましく乗り越えようとした江戸の民衆の豊かな想像力の一端に触れようとするものである。

２．展示プロジェクト委員会の概要

新型コロナの感染拡大の影響もあり，年度前半は展示プロジェクト委員会を開催できす，もっぱらメール等で連絡を取り合い，展示の構成内容について意見交換をおこなった。12月に第一回の展示プロジェクト委員会を開催し，展示構成案をおおよそ固めた。３月に第二回の委員会を開催し，黄雀文庫収蔵品から展示作品の選定を終えるとともに，関連する歴博収蔵資料等による内容補足の案について検討をおこなうとともに，ポスター案など広報関連の検討もおこなった。

３．展示プロジェクト委員（◎：代表，○：副代表）
（館外）
　佐藤　光信　公益財団法人平木浮世絵財団・理事長
　森山　悦乃　公益財団法人平木浮世絵財団・理事・主任学芸員
　松村真佐子　公益財団法人平木浮世絵財団・学芸員
　湯浅　淑子　たばこと塩の博物館・主任学芸員
（館内）
◎大久保純一　本館研究部・教授
○島津　美子　本館研究部・准教授
　久留島　浩　本館研究部・特任教授

川村　清志　本館研究部・准教授

企画展示「学びの歴史像―わたりあう近代―」

1．展示プロジェクトの趣旨

19世紀から20世紀半ば頃までを対象に，日本列島で近代国民国家とその構成員が生成される過程を，「学び」という切り口から総体的に見直し，展示で表現する。その際強く意識するのは次の２点である。まず，伝統から近代へ，欧米からアジアへ，中央から周縁へ，強者から弱者へといった一方的な道筋から歴史を描くことはできるだけ排し，相互関係や双方向性から眺める観点。そして，学校だけが「学び」の場ではないという当たり前のことを歴史のなかからとらえ直そうとする観点である。基幹研究「学知と教育から見直す近代日本の歴史像」(2018～2020年度）の成果を展示という形で示すとともに，総合展示第５室のリニューアルを見越したものでもある。

具体的には以下の諸点がクローズアップされる。１ 近世後期から幕末維新期の日本は，地理情報や言語などの相互作用を通じて，いかなる世界認識の進化・変化をなすに至ったのか。２ 幕府によって開始された近代化は，明治政府によって継承されたため，旧政権の担い手だった者もその政策に参加することが可能だった反面，狭義の政治・行政以外の文化・教育といった分野では「敗者」とみなされた旧幕臣も特有の役割を果たしたのではないか。３ 明治の殖産興業政策の下，新たな産業とその技術が欧米から取り入れられた一方，在来産業はどのように自らを再生させることができたのか，そこでの博覧会の役割とは。４ 病（やまい）との対峙。近世的「養生」から近代的「衛生」への変化に対し表出した違和感，感染症とのわたりあい，ハンセン病政策が新たに作り出す価値観とは。５ 千島列島や「蝦夷地」のアイヌは自らの言葉で，自らの手で，どのように未来を描いたか。６ 学校の登場。近代天皇制を背景とした学びの場を成立させるための舞台装置とは。また，音楽や体操を通じて行われる身体の「鋳直し」に対し，人々はどのように対峙したのか。

一見するとアラカルト風ではあるが，上記の諸テーマが持つ問題意識を総合することで全体としての時代像を描くことを目指す。

2．展示プロジェクト委員会の概要

新型コロナウイルス感染症拡大の影響により，対面による全体での展示プロジェクト委員会は開催せず，各コーナー担当者間の打合せを重ねた。

3．展示プロジェクト委員（五十音順　◎：代表，○：副代表）

（館外）

石居　人也　一橋大学社会学部・教授
小川　正人　北海道博物館・学芸副館長
落合　　功　青山学院大学経済学部・教授
木村　直也　元立教大学・特任教授
北原かな子　青森中央学院大学・教授
塩原　佳典　畿央大学教育学部・准教授
高木　博志　京都大学人文科学研究所・教授
谷本　晃久　北海道大学文学部・教授
得能　壽美　法政大学・非常勤講師
保谷　　徹　東京大学史料編纂所・教授

（館内）

◎樋口　雄彦　本館研究部・教授
○樋浦　郷子　本館研究部・准教授
福岡万里子　本館研究部・准教授
小瀬戸恵美　本館研究部・准教授

企画展示「中世武士団―地域に生きた武家の領主―」

1．展示プロジェクトの趣旨

中世武士は，世襲制の職業戦士であるとともに，地域の領主としても存在した。中世武士の領主支配は，武士個

人の力量によって実現したわけではなく，主に一族と家人によって構成された武士団という集団（組織）を形成することで実現した。そのため本展示では，武士団を戦闘集団ではなく「領主組織」という観点から捉える。中世武士が武士団という領主組織を形成して遂行した領主支配の実態と展開について，13世紀～15世紀を中心に，中世の文献・考古・美術資料のほか，近世～近代の絵図・土地台帳や現地調査に立脚して復元した本拠景観にもとづき，その具体相を展示する。事例には，豊かな資料を今日に伝える，益田氏･肥前千葉氏･越後和田氏を主に取り上げる。

なお，本展示は2016～2018年度国立歴史民俗博物館基幹研究（A）「中世日本の地域社会における武家領主支配の研究」（研究代表者：田中大喜），同（B）「中世日本の国際交流における海上交通に関する研究」（研究代表者：荒木和憲），ならびに2019～2022年度科学研究費補助金基盤研究（B）「西遷・北遷東国武士の社会的権力化」（研究代表者：田中大喜，課題番号：19H01313）の成果公開でもある。

2．展示プロジェクト委員会の概要

①2021年７月11日（日）　第４回展示プロジェクト会議（歴博第１会議室・Zoom併用開催）
　展示資料の内容と配置の確認，図録の内容と執筆分担の確認
②2022年３月13日（日）・14日（月）　第５回展示プロジェクト会議
　展示動画撮影，報道向け内覧会
※関連する調査については，科研費のページを参照のこと。

3．展示プロジェクト委員（◎は代表，○は副代表）

（館外）
小野　正敏　国立歴史民俗博物館・名誉教授
角野　広海　島根県立石見美術館・学芸員
高木　徳郎　早稲田大学教育・総合科学学術院・教授
田久保佳寛　小城市教育委員会・係長
出口　晶子　甲南大学文学部・教授
中司　健一　益田市歴史文化研究センター・主任
西田　友広　東京大学史料編纂所・准教授
水澤　幸一　胎内市農林水産課・参事
湯浅　治久　専修大学文学部・教授

（館内）
○荒木　和憲　本館研究部・准教授
河合佐知子　本館研究部・特任助教
小島　道裕　本館研究部・教授
後藤　　真　本館研究部・准教授
鈴木　卓治　本館研究部・教授
◎田中　大喜　本館研究部・准教授
松田　睦彦　本館研究部・准教授
村木　二郎　本館研究部・准教授

企画展示「加耶―古代東アジアを生きた，ある王国の歴史―」

1．展示プロジェクトの趣旨

古墳時代の「倭」の社会は，朝鮮半島から多様な文化をさかんに受け入れ，取捨選択し，変容させ，みずからの文化として定着をはかる。それは須恵器や鉄器の生産，金工技術，馬匹生産，灌漑技術，炊事道具やカマドなど多岐にわたる。その中で最も頻繁な交渉を重ねた政治体が加耶であった。加耶はひとつの古代国家を形成することはなく，金官加耶，大加耶，小加耶，阿羅加耶などがいくつかの地域政治体がゆるやかな連携をはかっていた。その加耶の実態は，近年の韓国における調査・研究によってかなり具体的に明らかになっている。その最新の姿を墳墓や集落から出土した諸資料から提示し，あわせて倭との交渉様態を描くのが，本展示プロジェクトの趣旨である。

そのために，学術交流協定の締結機関である韓国国立中央博物館に資料貸与や展示内容についての全面的な協力を仰ぐ。中央博では2019年冬に，加耶の実態に関する企画展示を実施した。また，九州国立博物館においても，加耶に関する展示を企画していることから，本展示は歴博と韓国国立中央博物館及び九州国立博物館との共催展示と

する。当初は，2020年７月に開催予定であった本展は，コロナ禍のために延期となった。韓国国立中央博物館，九州国立博物館との協議によって，2022年後半期における開催を予定している。

総合展示第１展示室のテーマ４（倭の登場），テーマ５（倭の前方後円墳と東アジア）の国際交流に関する内容やこれまで進めてきた韓国諸機関との国際交流事業，歴博共同研究「古墳時代・三国時代の日朝関係における交渉経路と寄港地に関する日韓共同研究」を展示の学術的な基盤とする。

２．展示プロジェクト委員会の概要

図録，展示室設計，演示具，展示パネル，ポスターなどの準備作業は，昨年度までにほぼ終了している。本年度は，共催機関である韓国国立中央博物館と九州国立博物館との協議が活動の中心となった。協議の結果，展示実施時期について，2022年10月４日（火）から12月11日（日）とすることを合意した。また，図録の内容について，韓国国立博物館との位置合わせを実施した。展示開催に向けて，展示プロジェクト委員会は2022年度も維持する。

３．展示プロジェクト委員（◎は代表，○は副代表）

（館外）

梁　成　赫　大韓民国国立中央博物館考古歴史部・学芸研究官

白井　克也　九州国立博物館企画課・課長

（館内）

○上野　祥史　本館研究部・准教授

◎高田　貫太　本館研究部・教授

仁藤　敦史　本館研究部・教授

松木　武彦　本館研究部・教授

企画展示「いにしえが，好きっ！―近世好古図録の文化誌―」

１．展示プロジェクトの趣旨

古いモノに関心を持ち，これを集め，伝えようとする行為は，前近代から存在する。実際にモノを集めることはもちろん，それが難しい場合は拓本や絵という形で，それらを集め，人々と情報を共有しようとした。こうした営みは，近代以降の博物館にもつながる発想であるが，前近代にはその前提として古器物に対する関心は広く，そして豊かに存在していたのである。

本展示では，幕末～明治にかけて神戸の豪商・吉田家が三代にわたり編纂した古器物図譜（＝図録）である『聆涛閣集古帖』（本館蔵，以下『集古帖』）に関する共同研究「『聆涛閣集古帖』の総合資料学的研究」（研究代表者：藤原重雄，2017年度～2019年度）の成果を中心に，『集古帖』に描かれた古器物の実物や複製・復元品等を立体的に展示するほか，『集古帖』を編纂した神戸の吉田家に関する資料から浮かび上がる好古図譜編纂の背景，同時代に関心が高まる正倉院宝物図とその模造製作の世界，さらには近世好古家の古器物へのまなざしとネットワークなどに関する展示を通じて，前近代における歴史資料の分類や概念，古器物の情報共有を通じた「知のネットワーク」の実態を展示によって明らかにする。あわせて，さまざまなモノを蒐集・整理し，これを伝えていった歴史について広い視野から展示する。

２．展示プロジェクト委員会の概要

2021年度も，前年度に引き続き，１年を通じて新型コロナウィルスの感染がおさまらず，また県外在住の委員が多かったことから，対面による展示プロジェクト委員会を行うことが叶わなかった。展示に関する館外の資料調査についても同様の理由で先方との調整がつかず，中止を余儀なくされた。

そのため，やむを得ずオンライン形式による展示プロジェクト委員会を行うことになった。第１回は，2021年12月12日（日）に行い，企画展示の開催計画ならびに展示構成案についての検討，各委員からの出陳希望リストについての説明と意見交換，関連イベントについての提案と意見交換等を行った。

第２回は，2022年１月22日（土）と１月23日（日）に行った。初日は，考古学分野の委員により，出陳候補となる考古資料についての検討を行った。２日目は，初日における検討もふまえた全体会を行い，展示の構成案の検討，出陳候補リストの検討，企画展示のタイトルの検討などを行った。全体で集まる会議は以上の２回となり，その後は，考古分野，文書・典籍分野，美術・工芸分野に分かれて，借用資料の絞り込みについて個別に検討した。

3．展示プロジェクト委員（◎：代表，○：副代表）

（館外）

藤原　重雄　東京大学史料編纂所・准教授
一戸　　渉　慶應義塾大学斯道文庫・准教授
稲田奈津子　東京大学史料編纂所・准教授
岩橋　清美　國學院大學・准教授
落合　里麻　東北生活文化大学・講師
佐藤　洋一　学識経験者
清水　　健　東京国立博物館学芸研究部調査研究課工芸室
徳田　誠志　宮内庁書陵部・陵墓調査官
古市　　晃　神戸大学人文学研究科・准教授
村野　正景　京都文化博物館・学芸員
山下　大輔　関西大学博物館・学芸員
吉田　　広　愛媛大学ミュージアム・教授

（館内）

○小倉　慈司　本館研究部・教授
清武　雄二　本館研究部・特任教授
島津　美子　本館研究部・准教授
仁藤　敦史　本館研究部・教授
村木　二郎　本館研究部・准教授
◎三上　喜孝　本館研究部・教授
後藤　　真　本館研究部・准教授

企画展示「陰陽道と暦の世界（仮）」

1．展示プロジェクトの趣旨

現在の日本列島上の社会の基盤を成している暦日感覚は，明治の改暦で太陽暦が採用されたことが大きな画期となったことはよく知られている。2023年は明治改暦（1873年）から，ちょうど150年の節目の年に当たる。このことをふまえて共同研究「奈良暦師吉川家文書を中心とする暦・陰陽道研究の史料基盤形成」（代表・梅田千尋〔京都女子大学〕，2018～2020年度）による資料調査および研究の成果を中心とする展示を行う。

ここでは近年の『新陰陽道叢書』の刊行（2020～2021年）をはじめとする陰陽道研究の進展に依拠しながら，陰陽道の基礎的な資料を集成し，日本列島社会における暦とその作成・管理をはじめとする暦日・天文等に関する陰陽道の姿を具体的に提示する。前近代の暦に深く関わった陰陽道の形成から展開，衰退に関する史資料をなるべく広範に展示することで，俗的なイメージが先行しがちな陰陽道･陰陽師の実体とその歴史的民俗的な役割を提示し，新たな研究の礎石としたい。確実な資料に基づいて，陰陽道について考える機会を提供することが目的である。さらに暦関係資料を多角的な視点からとらえ，暦をめぐる文化を考察するとともに，時間をめぐる意識や観念の形成，天変や観天望気をめぐる習俗までもとらえる糸口としたい。

2．展示プロジェクト委員会の概要

上記共同研究がコロナ禍によって一部，延長したため，今年度は共同研究会としての性格を持たせつつ開催し，従来の暦や陰陽道に関する展示情報を分析し，主として展示内容の研究面からの注意点について議論を進めた。

第1回　2021年6月12日（リモート）

近藤彩音氏「暦関係展示会の分析と検討 ―「陰陽道と暦の世界」展示へ向けて―」
下村育世氏「近代の暦とその史資料―博士論文で依拠した資料紹介と，来るべき展示に向けて―」

以上の報告をもとに展示内容の範囲，借用を検討すべきコレクションおよび所蔵機関の情報，民間企業との連携，展示技法のアイデア，図録などについて討論をおこなった。

第2回　2021年8月9日（リモート）

近藤絢音氏「陰陽道関係展示会の分析と検討」

以上の報告に加えて，各委員の専門とする時代および領域の資料の範囲および借用・展示の可能性についての報告があり，それらを土台に，展示する際の留意点，展示空間の利用方針，展示全体のタイトルなどについての討論

をおこなった。

第３回　2021年10月24日（リモート）

前回に引き続いて各委員の専門とする時代・領域の資料の展示構想の報告を行ない，展示構成に関する注意点を確認した。また内容を的確に示しつつ，一般にもわかりやすい展示の全体タイトルについて議論し，「陰陽師とは何者か―うらない，まじない，こよみをつくる―」とすることとした。

また巡回展示を西日本で行なう可能性，関連企画としての講演会，シンポジウムなどを積極的に試みることも確認された。特に図録については展示終了後も活用できるものをめざすことが必要であることが提示された。

３．展示プロジェクト委員（◎：代表，○：副代表）

（館外）

梅田　千尋　京都女子大学・教授
林　　淳　愛知学院大学・教授
細井　浩志　活水女子大学・教授
赤澤　春彦　摂南大学・准教授
遠藤　珠紀　東京大学史料編纂所・准教授
小田　真裕　船橋市資料館・主任主事
松山由布子　広島大学・助教
下村　育世　一橋大学・特任講師
近藤　絢音　神奈川県立公文書館

（館内）

◎小池　淳一　本館研究部・教授
後藤　　真　本館研究部・准教授
田中　大喜　本館研究部・准教授
福岡万里子　本館研究部・准教授
○松田　睦彦　本館研究部・准教授

企画展示「歴博色尽くし（仮）」

１．展示プロジェクトの趣旨

「色」をテーマとしたコンパクトな館蔵資料展として企画した。館蔵資料（複製・レプリカを含む）の中で，着色された資料を展示し，それぞれに解説を加え，全体として日本における色と人とのかかわりが浮かび上がる展示構成を目指す。また，資料の色彩・色材に対する科学分析から何がわかるかについても，あわせて示す。

２．展示プロジェクト委員会の概要

本企画展示は2024年春の開催と正式に決定した．上野教員を展示プロジェクト委員に加え，高田教員と共同で「考古資料の色」のコーナーをご担当いただくこととした．「彩色された建築模型（坂本，濵島）」に出展予定の建築模型について，状態を確認し展示のための補修等について検討するための模型の仮組みを実施した．展示を以下の６つのコーナーから構成することと，展示の造作ならびに図録の製作においては，簡潔でコンパクトな作りになるよう留意する，という方針は変わっていない．

○彩色された建築模型（坂本，濵島）○色見本の世界（鈴木，澤田，島津）○疱瘡絵と赤（大久保，関沢）○蒔絵・螺鈿における色彩表現（日高）○考古資料の色（高田，上野）○隕石から作られた刀剣（斉藤）

３．展示プロジェクト委員（◎：代表，○：副代表）

（館外）

濵島　正士　国立歴史民俗博物館・名誉教授

（館内）

◎鈴木　卓治　本館研究部・教授
○坂本　　稔　本館研究部・教授
上野　祥史　本館研究部・准教授
大久保純一　本館研究部・教授

斎藤　　努　本館研究部・教授
澤田　和人　本館研究部・准教授
島津　美子　本館研究部・准教授
関沢まゆみ　本館研究部・教授
高田　貫太　本館研究部・教授
日高　　薫　本館研究部・教授